

平井信義先生 追悼

「三尺の童子を拝す」と平井先生

帆足 暁子

平井信義先生は、昭和十六年東京帝国大学文学部卒業し、さらに昭和十九年に東北大学医学部を卒業されました。その後、小児科医として愛育研究所に勤務され、お茶の水女子大学教授を経て、大妻女子大学教授を定年で退職されるまで、研究と保育者養成に、情熱的に、楽しく、真摯に携わってこられました。

先生の研究テーマが子ども全般、多岐にわたることとは周知のとおりで、その情熱とエネルギーには感服させられます。特に、現代にも継承されているウーン大学小児科のアスペルガー教授に学ばれて、

日本にアスペルガータイプの自閉症を報告されたことや、日本独特の「学校嫌い（現在の不登校）」である子どもの特徴に早くから気づき、警鐘をならされたことなどは、先生の代表的な研究です。そして、保育分野においては、乳児保育研究や保育所保育指針の改訂など、国の保育施策の根幹として活躍される一方、「しつけ無用論」「叱らない子育て」などの爆弾宣言をなさり、物議を醸したこともありました。保育者が育つための援助を惜しまず、保育者を対象とした書物や研修会・講演会の多さは、追隨を許していないと思います。

「三尺の童子を拜す」とする徹底的な「子どもから学ぶ」哲学は、今でも平井先生のお名前とともに、保育者には引き継がれているのではないのでしょうか。また、『「こころの基地」はお母さん』（企画室一九八四年）を代表とする多数の育児書において、その明快さと共に人間の本質や優しさを伝えておられたと思います。

先生の業績をあげるときりがなくなりますが、「人格構造論—自主性と思いやりの研究」も壮大な研究で、晩年まで続けられました。私は大学の卒業論文のテーマに「思いやりの発達」を選んだことを契機として、それ以来二十年以上さまざまな場面で平井先生の教えを受けることができました。

先生のお話の中で印象に残っているのは、東北医大の「小児診断学」の講義に「普通の子ども」を時々連れてきて診断させ、普通の子どもを知らなければ病気の子どもはわからないことを教えてくれた教授、お茶の水女子大学附属幼稚園に初めて行った

時に「ひらいくん、今日は心理学のことは忘れなさい」と学問から子どもをみるのではなく、子どもそのものをみなさいということを教えてくれた倉橋惣三先生、同様に平井先生が保育園に持っていった研究を見て「これ、本当に子どもなの？」と子どもをちゃんと見ていないことを教えてくれた秋田美子先生。平井先生はその時々に出会った先生方からのメッセージを受けとめ、ご自分の哲学を創り上げていかれたのだと思います。

平井先生が亡くなられ、今の子どもたちの育つ状況を思いますと、平井先生に教えて頂いたことを一つひとつ社会に、子どもの臨床にかえていくことが、平井先生の教えを受けた私たちの役割だと、思いを新たにしています。

平井信義先生のご冥福を心より祈念いたします。
(ほあし子どものこころクリニック 副院長)

平井先生は、平成十八年七月七日ご永眠されました。